

書評

大東和重 著

『台南文学 日本統治期台湾・台南の日本人作家群像』

関西学院大学出版会、2015年 510頁

——「孤独の香気」を再現させた稀有な文学研究書——

垂水 千恵

はじめに

大東和重著『台南文学』を『日本台湾学会報』で書評することが「正しい」のかどうかわからない。もちろん、それはこの著が『日本台湾学会報』にふさわしい学術的水準を備えていないからではない。本書は後述するように、近年続く豊かな台湾文学研究のもう一つの高い峰となることは疑いもない充実した研究書である。

ただ、筆者の捕らえた本書の一番の本質は全編に通底する孤独の香気であり、おそらくそれは「あとがき」に書かれているように、大東が最初は台湾研究者として台湾／台南に赴いたわけではなかった、という僥倖に由来するものであると思うからである。例えば、大東は「終章 鳳凰木の花散る街で」において次のように述べている。

台南の街における孤独を描くとき、台南で文学を書いた日本人作家の筆は、ふるえるような熱を帯びる。(中略)前嶋しかり、河野慶彦しかり、吉村敏しかりである。鳳凰木に託されるのは、自らの孤独である。

新垣宏一もそうである。台南を愛しつつも、植民地の地方都市にあつて、文学を語る同志も少なく、孤独に憔悴して街をさまようとき、目を挙げた先には、街路樹として植えられた鳳凰木があり、初夏には別名火焰樹の名にふさわしく、燃えるような花をつけ、幻のような風景を作り上げた。(中略)鳳凰木が台南の街に移植され、街を飾ったように、日本統治下の台南には、日本語がもたらされ、文学の花が街に咲いた。熱帯の強烈な光に焼かれつつ、炎のような花の蔭で蟬が狂おしく啼きつづけるように、文学の中心から遠く離れたやるせなさに身を焦がし、孤独をかみしめつつ、彼らは文学の声をあげた。本書は、彼らの声を、もう一度、文学の声として響かせ、聴くための一冊である。

たぶん、台南文学者の孤独の声を、大東は研究対象として聴いたのではなく、最初に大東の「ふ

るえるような熱」があったからこそ、その声が聴こえたのである。そうした僥倖があったからこそ、台南文学者たちの孤独の香気を損なわないまま、研究書という形で現前させることに成功したのである。

その背後には多くの（と少なくとも筆者は信じているが）文学研究者が直面せざるを得ない文学研究の矛盾が存在している。曰く、なぜ研究論文は文学作品本来の瑞々しさを保てず、研究者が触れたとたんに作品は標本のように色あせてしまうのか。なぜ作家の全体像にはいつまでも達することができず、掴んだと思ったものはいつも断片、破片でしかないのか。そもそも文学研究は作家にとっては（そして読者にとっても）全く無用の注釈、雑音でしかないのではないか。文学研究者とは作家の血の滲むような営為の結果生まれた作品を、安全な高みからつつきまわしている傲慢な害虫にすぎないのではないか。かと思えば一転、独自の読みを提示することを放棄し、作家の言説をただただ伝えるだけの代言人を任じて満足している寄生虫ではないのか。云々。

しかし、大東はそのような希望のないマイナス思考に陥ることなく、「ふるえるような熱」に導かれるままに、鳳凰木の花のごとく文学研究の可能性を蘇らせた。本書の第一の意義はここにある。

本書の概要およびコメント

では、冒頭に述べたようなためらいを残しつつも、以下、本書の内容を章立てにしたがって紹介するとともに、適宜コメントして行こう。

本書全体は序章、終章を含む八章から構成されている。まず「序章 鳳凰木の花咲く街」では駅から続く鳳凰木の街路樹が、台南を訪れた作家たちいかに鮮明な印象を与えたか、を説明した後、本書で扱う「台南文学」の範囲を明らかにする。それは1. 日本統治期に書かれたものであること。2. 台南で書かれた、あるいは台南を舞台とする文学であること。3. 日本語を用いた文学であること。4. 日本人作家のみを対象とすること。の4点である。また「以上の限定を加えた「台南文学」が、一定の規模と流れをそなえた「台南文学」として成立する」ための条件として、大東は①. 成立のための物質的な基盤 ②. 筆力・筆量ともに十分な書き手の存在 ③. 「台南文学」に独自性を付与する具体的な文学的テーマの3点を挙げている。

①の成立のための物質的な基盤については、教育を中心とする台南の歴史が詳細に語られており、説得力を持つ。ただ、③については主として台北との比較で「台南が台北とまったく異なるのは、そこが植民地としての台湾ではなく、台湾人の土地としての台湾を濃厚に感じさせる点がある」と台南の特色が語られている点が気になる。この説明は、なぜ台中を中心とする中部ではなく、台南なのか、という疑問に十分には答えられているとは言えない。それはたぶん本書が4. 日本人作家のみを対象としたことと無関係ではあるまい。もちろん、すでに大東の視野には呉新榮、楊熾昌などの台湾人作家が捉えられており、台南出身の台湾人作家については「別に一冊が書かれなければならない」とされている。しかし、日本統治期に活躍した台湾人作家をその視野に入れ始めた時に、台中ではない、台南文学という図式が果たして成り立つかどうか、は疑問と

して残る。

もう1点気になるのは、「台南文学」が「佐藤春夫「女誠扇綺譚」の圧倒的な影響を背景の一つの流れを作った」結果の産物とされている点である。この指摘は第一章の五節「〔女誠扇綺譚〕と台南表象」においても「女誠扇綺譚」は「のちの台南への旅行者や居住者にとって、街を歩く際のしるべとなり、また台南を描く上で圧倒的な影響の源泉となった」〔女誠扇綺譚〕には、読む以前と以降では、台南という都市のイメージが一変してしまうほど、都市のイメージに対する強い喚起力がある〕「日本語文学の王座」と繰り返し顔を出す。確かに本書で論じられている日本人作家についてはそうかもしれない。が、そう限定した段階で、いわゆる「台南文学」の魅力は半減してしまう。「女誠扇綺譚」のイマジネーションの範囲に収まってしまっただけを台南文学とすることは、自ら台南文学の可能性を狭める結果となるであろう。

その意味でも、願うべくは1章でもいいから台湾人作家の章を設けて、台南文学のダイナミズムを示唆してほしい。一章以下の各論はそれぞれにすばらしいだけに、序章でのやや生硬な図式化が残念である。もっともそれは『台南文学』というタイトルを選んだが故に避けられない性質のものかもしれない。賢明な大東は「終章 鳳凰木の花散る街で」で本書では取り上げられなかったが台南を描いた日本人作家たち、さらには台湾人作家たちのリストを挙げ、今後の発展の方向をスケッチしている。ただ、その賢明さは或る意味両義的であり、本書の背後に存在する膨大な作家群を加えた時、先に紹介した「台南文学」の定義も今後揺らがざるを得ないであろうことを示唆してしまう。かといって、『台南文学』というあまりに魅力的なタイトルを手放すに忍びなかったであろうことも十分理解できる。今後の大東がどのようにこの難問に取り組んでいくか、楽しみに待つことにしよう。

敢えて見取り図を示さねばならない故に綻びも見せてしまう序章ではあるが、しかし、続く各章は誠に読み応えのある論考が並んでいる。「第一章 佐藤春夫「女誠扇綺譚」の台南 - 「廃市」と「査媒嫺」は、廃墟の美としての台南イメージがどのようにもたらされたのか、ということと比較文学の見地から検証した章である。「三 「廃市」の系譜—死都ブリージュ・荷風の江戸東京・白秋の柳川」では、荷風を通じて佐藤春夫がローデンバックの『死都ブリージュ』を需要したのではないか、という興味深い推論を提示している。さらには同じくローデンバックの影響をはっきりと明言している白秋が使い始めた「廃市」という概念を、佐藤も「女誠扇綺譚」の中で使っていることを指摘、一九一〇年頃の日本で成立した「廃市」として都市を描く文学の流れの中に、「女誠扇綺譚」を位置づける筆致は鮮やかである。また、「女誠扇綺譚」が「台南を描いて鮮やかなのは、植民地で極めて弱い立場に置かれた女性、借金のかたとして人身売買された「査媒嫺」を、物語のかなめに置くからである」という指摘も興味深く、今後「女誠扇綺譚」論の必読文献となる論考であろう。

ところで、白秋には終章において大東も作品名だけは挙げている「台南旅情」という作品がある。「もの憂さや、老酒や、瓜子はとり食めども、／にほひなし、昼はまだ 彩燈の切子硝子。／空なりや、雲に行く日のまぼろし、ゆゑわかず、うつつなし、女童は言問へども。／梅雨ぐもり

影にのみ、朧たけて、低くのみ 鳥秋の飛びたわむと。／濡れがちや、朱の寂びや、反り棟の礮瓦 赤嵌楼。／瓜子、瓜子は眼の下の小さ黒子 齒にあてつつ、齒にあてつつ、愚しく美しく時は過ぎぬ。」という赤嵌楼を読み込んだ小品であるが、やや不思議に思うことに、この作品にはローデンバックの影響の下、白秋が得意とする澗む水の街・廃市という視点での台南が描かれていない。「台南旅情」が発表されたのは一九三四年、一九二五年に発表された「女誠扇綺譚」に拠る台南のイメージがすでに人口に膾炙して後だけに、敢えて避けたのだろうか、それとも白秋の目には台南は澗む水の街とは移らなかったのだろうか。小さくはあるが、気になる点である。これについて大東はどのような見解を持っているのだろうか。

このように序章、第一章、第四章と佐藤春夫「女誠扇綺譚」との関連によって整理された章（偶然かも知れないが、「あとがき」によると書き下ろしの部分）については、筆者の好みにも拠るのかもしれないがやや異論を唱えたいところもあるものの、「第二章 前嶋信次の台南行脚 ―一九三〇年代の台南における歴史散歩」となるとただ感嘆するのみである。イスラム史研究者である前嶋と台南の組み合わせの妙もさるところながら、不本意ながら台北帝大を去り、台南で八年間の「失意時代」を過ごした前嶋が、「亜熱帯の強い光線と色彩」の中で再生していく様を描いた本章に接することは、一篇の小説を読むがごとき至福の体験である。中でも「五 二度と戻らぬ時間―「媽祖祭」」に描かれた「一度切りの時間」は実にすばらしい。冒頭に引用した「熱帯の強烈な光に焼かれつつ、炎のような花の蔭で蝉が狂おしく啼きつづけるように、文学の中心から遠く離れたやるせなさ身を焦がし、孤独をかみしめつつ、彼らは文学の声をあげた。本書は、彼らの声を、もう一度、文学の声として響かせ、聴くための一冊である。」という言葉通りに、大東という再生機を通し、前嶋の香気が届けられる。

一方でその温かくも深い眼差しに感動させられるのは「第三章 庄司総一『陳夫人』にいたる道―『三田文学』発表の諸作から日中戦争下の文学へ」である。これまでもさまざまな庄司論、陳夫人論が書かれてきたが、「大東亜文学賞作家の戦後―「文学的横死」」という戦後の庄司像を描いたことにおいて、大東の論考は一頭地抜いた感がある。「作品の腐蝕が作家そのものの腐蝕となって、いかに多くの作家が文学的横死を遂げたことか」という高見順の引用、さらには「でも（不遇に苦しむのは）あなただけだろうか？」と亡夫に語りかける庄司の妻野々実の回想の引用が、対位的に庄司の晩年像を浮かび上がらせる。これもまた一篇の小説を読むがごときみごとさである。

第五章では國分直一が、第六章では新垣宏一が取り上げられており、それぞれに議論を呼びそうである。特に新垣については2015年に台湾で『湾生回家』がヒットしたことを含め、「湾生」論の角度からも論じることが可能であろう。

おわりに

「終章 鳳凰木の花散る街で」では、熱帯に花開く鳳凰木に対して「まあきれいだこと」と日本語で呼びかけることの「些細な、しかし拭い去ることの困難な違和感」を踏まえたうえで、敢

えて「孤独と違和感を引き受けつつ書かれる事に、台南文学の意味はある」と述べられている。ただ1点を除いて、この大東の主張には完全に同意する。その1点とは何か、と言えば、こだわるとは、その経験は台「南」には限らない、ということである。個人的な経験から語るなら、大東が二十代後半を台南で過ごし、圧倒的な影響を受けたように、筆者も三十代前半を台中・大度山山中のキャンパスで過ごした。そのキャンパスには本当に見事な鳳凰木の並木が続いていたのである。確かにその美しさは「まあきれいだこと」という日本語では捕らえられないような圧倒的な何かであった。その時の自分がどんな日本語で、その美に向かいあったのかわからない。ただ沈黙するしかなかったのかもしれない。が、とにかく鳳凰木に囲まれて過ごした数年は確実に筆者を変えたと思う。

さらに、もう一人、鳳凰木のもたらした違和感を押し返すように自らの思考を構築した作家がいる。その言葉を引用してこの書評の最後を飾ろう。

「ホーボク／私達と同じ言葉を教えられてその他国人の前で発音する羞恥が伏目になった彼女から悲しげに響いた。書きはじめると、すぐ解つた。鳳凰木だつた。」(埴谷雄高「虚空」)

ちなみに、これが台北近郊の紗帽山での物語であることに、『台南文学』の著書はどのように答えてくれるだろうか。

.....

清水美里 著

『帝国日本の「開発」と植民地台湾－台湾の嘉南圳大圳と日月潭発電所－』

有志舎、2015年、320頁

——烏山頭の賑わいを見ながら八田與一と三年輪作を考える——

やまだあつし

『KANO』は野球映画だが、不思議な登場人物がいて不思議なシーンがある。八田與一と嘉南大圳の通水シーンである。野球とは関係なく映画後半部は登場しない八田與一が、大きく取り上げられている。嘉南大圳の烏山頭ダムは1930年4月に竣工したはずなのに、1931年夏にダムから放水する式典シーンがあり、嘉南大圳の幹支線水路に水が流れたことを農民だけでなく(同年夏の甲子園野球大会に出場を決めたばかりの)嘉義農林の球児も大喜びしている。これらのシーンが無ければ3時間も掛からない尻にやさしい映画になったはずだが、監督は八田與一を登場させたかったのだろう。

『KANO』だけなら、映画の演出と言って済ませることもできる。烏山頭ダムに行くとさらに

驚かざるを得ない。評者は先日、10 数年ぶりに訪れた。ダム周辺が有料の公園なのは相変わらずだが、以前は存在しなかった八田與一記念園区という区画が出来、八田與一の官舎が、部下たちの官舎とともに建っていた。説明によれば八田の官舎は土台だけ残っており、その上に資料を基に再建したとのことである。部下たちの官舎は、倒壊寸前の廃屋からの再建であった。官舎の庭には、與一の妻の外代樹が浴衣姿で子どもを抱いている像が立っていた。日曜日の園区は賑わっており、浴衣姿の台湾人が多数闊歩していた。次に八田與一の銅像を見た。前は像に近づけられなかったが、今回は紐で柵が作られ遙拝するしかなかった。八田與一の神格化を感じた。

さて、八田與一と嘉南大圳には、昔も不思議な話があった。三年輪作である。農民が耕作手法として自発的に輪作するのではなく、給水する側が給水方法を3年周期で変更して農民に輪作を迫るという制度である。統治する立場から見ればこの制度は涂照彦流に「水の支配」の手段だと解釈できるにしても、農民の側がどうしてこんな不可解な制度に長年従ったのかは疑問であった。そしてその制度を考えた（とされる）八田與一が顕彰されることも。

今回、書評するのは、清水美里『帝国日本の「開発」と植民地台湾－台湾の嘉南大圳と日月潭発電所－』（有志舎、2015年）である。本書は三年輪作が続いた秘密を日月潭発電所の分析とともに明らかにしてくれるのだろうか。

本書の構成は、以下の通りである。

序論

第一章 水利をめぐる権利の動揺

第二章 嘉南大圳への台湾農民の抵抗と交渉

第三章 嘉南大圳灌漑区域の葛藤

第四章 日月潭発電所工事の展開－始動と停滞そして再開

第五章 在台日本人の日月潭工事再開運動と土木業者の示威行動

第六章 電化の対象の拡張－台湾電力株式会社の営業方針

補論 八田與一物語の形成とその政治性－日台交流の現場からの視点

終章

序章は問題設定である。第一節は、植民地開発についての評価から議論を始めている。本書は既存の評価に対し、開発が現地社会にどのように受け止められ、あるいは植民地社会の状況が開発事業にどのように影響したかという実証が不足していることを主張している。本書が前半で論じる嘉南大圳についても、評価は八田與一の人物評ばかりで、嘉南大圳が当時どのような混乱を社会にもたらしたかについての言及が少ないことを指摘している。第二節と第三節は先行研究の分析である。第二節は水利や電力に関する狭義の先行研究の紹介であり、矢内原や涂から、近年の陳鴻図、北波、湊などを手際よく論じている。10頁の鄭英明（1972）は評者も知らなかったもので参考になった。第三節は個々のインフラ建設を越えた広義の植民地開発と近代についての先行研究の紹介である。著者は第三節の議論を踏まえた上で、本書の目的を

植民地という権力の非対称的状況下において規定された政治的・経済的構造の問題と、これによって引き起こされた社会矛盾に注目し「植民地的開発」とは何かを論じる。その際、開

発事業が植民地社会に一方的に影響を与えたのではなく、植民地統治機関と台湾人、在台日本人の相互作用が開発事業を変容させたと考え、これを日本植民地期台湾の事例に即して論じていくこととする (19 頁)

としている。第四節は資料紹介、第五節は本書の構成である。

前半の**第一章**から**第三章**は、嘉南大圳についての分析である。**第一章**は台湾の水利慣行を論じている。まず清代台湾の水利慣行を論じ、それら慣行を総督府が (1920 年代の内地延長主義を待つことなく) 1905 年頃から、「旧慣」とは呼びながらも日本民法上の概念に適合する形へと改編し始めたことを指摘している。次に嘉南大圳の三年輪作の仕組みと問題点を扱う。三年輪作が嘉南大圳地域の従来の水利慣行とかけ離れたものであったことを明らかにした上で、この制度は 1920 年代の甘蔗増産と米穀増産政策の抱き合わせ、および水資源不足等の複合的要因による妥協の産物として導入され、1930 年代の米穀増産抑制政策のための水利設備拡充制限によって維持されたと論じている。

第二章は、嘉南大圳への台湾農民の抵抗と交渉についての議論である。最初に嘉南大圳の建設費が官民で折半されるきっかけとなった「嘆願書」と嘉南大圳の運営システムを示した後、嘉南大圳への抵抗としての水路開設拒否や水租不納運動、そして台南州地主会による嘉南大圳管理者や台南州知事との交渉などを分析している。これら抵抗や交渉のうち、知識人の運動は 1930 年代半ばには終息するが、農民たちによる盗水などはその後も継続したことを紹介している。

第三章は、嘉南大圳が台湾農民にどう受容されたかの検討である。まずは水利実行小組合の役割を論じている。嘉南大圳で幹線水路から農地まで水を届けそして排出する給排水路は、各地に組織された水利実行小組合が運営していた。これは台湾農民の自治組織であったが、植民地権力は (郡官吏の兼任者の多い) 実行小組合聯合会を通じて各小組合をコントロールするとともに、模範的な小組合長を選ぶことで小組合間の競争をあおっていたことを指摘している。しかしながら三年輪作の実行率は、水稻区では 90% 近くで水稻が作付られたものの、甘蔗区や雑作区では 70% にとどまり、嘉南大圳は農民を十分コントロールできなかったことを明らかにしている。

後半の**第四章**から**第六章**は、日月潭水力発電所工事を中心とする台湾電力株式会社についての議論である。**第四章**は、日月潭発電所建設工事の始動から停滞、そして再開の流れを扱い、停滞や再開には内閣と総督、台湾電力の重役が同じ党派的派閥の人物であるか否か (同じであれば推進され、前政権の関係者が残留すると停滞する) が影響したことを指摘している。

第五章は、在台日本人が日月潭水力発電所工事に対してどのように対応したかである。彼らは (電力を利用した工業化への期待ではなく) 土木作業などの請負を期待していた。1928 年の貴族院審議で日月潭水力発電所の建設再開のための外債案がもめた際には、再開を推進する大演説会を催している。いよいよ建設再開が現実のものとなると今度は、日本本国からの土木請負業者を排斥して自分たちがより多く受注することを主張し、示威行動を行っていたことを分析している。

第六章は、日月潭建設工事再開の付帯条件ともなった、松木幹一郎社長による台湾電力の経営改革の一環としての電気の販売拡大を考察している。創設時の官僚的な経営を離れ、小口電力の勧誘がどのように行われていたかを、特に勧誘課による顧客開拓について論じている。

補論は、議論を現代に転じて、八田與一が現代でどのように語られているか、物語を現代まで支えているものは何なのか、そこで日本側と台湾側とで重視している要素はどのような違いがあるのかをそれぞれ紹介している。特に日本と台湾の違いとして、日本側は八田の「パイオニアとしてのエンジニア」を強調するのに対し、台湾側は八田が差別をしなかったことと、妻の八田外代樹の「殉死」を強調していることは興味深い。

終章は本書のまとめである。本書前半で議論した台湾人地主・農民による嘉南大圳灌漑システムへの反対運動と、本書後半で議論した在台日本人の日月潭発電所の建設再開運動そしてその建設に在台日本人事業者を関与させるよう求める運動を比較している。これから、二つの開発事業に対する植民地住民の反応が台湾人と在台日本人とで異質であることと、植民地統治機構側の住民の扱いも支配民族(日本人)と被支配民族(台湾人)とでは差別的な違いがあることを指摘し、「植民地的開発」の問題点、植民地の世論や公論のあり方、開発側の相互作用による変化、そして現代の我々がこのようなインフラとどう向き合うべきか、について順次論じている。

本書の評価を論じたい。

まず本書が、丹念に資料や先行研究を渉猟して分析を行った点を評価したい。19-21頁に示されている通り、近年の台湾や日本における資料の発掘・公開と電子化の進展を活用したのはもちろんのこと、「台湾省嘉南農田水利会」档案(国史館台湾文献館蔵)や「台湾電力資料」(東京大学経済学資料室蔵)のような一次資料をきちんと使っている。特に「台湾省嘉南農田水利会」档案から三年輪作の実行率を郡別に算出したり(124-125頁)、1937年に嘉南大圳組合が刊行した『実行小組合役員の事績』を利用して、どのような役員が組合にとって評価される人物であったかを指摘したりした(さらに『実行小組合役員の事績』で筆頭に挙げられた呉連という役員が、小説や宣伝映画で取り上げられたことを指摘した)第三章は圧巻である。また単に幅広く資料を見るだけでなく、資料や先行研究における議論の偏りを意識して、複眼的な視点で分析を展開しているのも良い。

次に過去の事実分析だけでなく、補論という形で現代の歴史認識を論じ、「歴史の取捨選択」のあり様を一冊の中に同居させているのは大変興味深い。我々はともすると歴史事実の分析は事実だけ、歴史認識の分析は認識だけの話にまとめてしまうが、この両者は不即不離である。このように日本側の認識と台湾側の認識、そして第一章以降のそれぞれの運動の事実を並べることで、単に日本側の「歴史の取捨選択」を見出すだけでなく、台湾側の「歴史の取捨選択」を見出しているのは評価に値する点である。本評の最初で述べたように台湾における八田與一への顕彰は、驚くほどである。その台湾側の取捨選択がいかなるものであるか、本書を読んだから烏山頭へ行った評者は、八田與一官舎の庭に立つ外代樹像(242頁によれば、2013年建立)を見て納得した。

一方で問題点としては本書を読んでも、なぜ嘉南大圳区域の農民が長年に渡って三年輪作を受け入れ続けたのか、そして嘉南大圳を(さらには築くのに功績があり、三年輪作を導入したとされる八田與一を)今は好意的に見ているのか、実は判然としないことを挙げたい。第三章がそれへの答となるはずだが、見えるのは嘉南大圳への農民の葛藤と、植民地権力の抑圧の構図のみで

ある。補論は、現在の三年輪作の「語り」が、植民地権力の言説を引き継いでいることを指摘しているが(237頁)、なぜ農民の反対が忘却されているのかが、明らかではない。

ここで評者が著者に対して問い掛けたいのは、(1) 稲の品種改良と水との関係をなぜ考察しないのか、(2) 三年輪作は嘉南大圳第1期工事後の暫定措置であり、近い将来に(実際は1960年代まで持ち越されたが)撤廃されるとの展望が、すでに1939・40年には見えていたのではないのか、の2点である。

(1) について。47-48頁では、1920年代には甘蔗では品種改良が進んだだけでなく、「早植え」という栽培技術の変化も加わって、水の問題がそれほど重要でなくなった。そのため、嘉南大圳区域内外で甘蔗の収穫量の増え方に差異がなかったことを本書は指摘している。ではなぜ本書は、稲の品種改良や蓬莱米の問題をもっと考察しないのであろうか。1910年代の在来米改良、1920年代の蓬莱米開発によって、稲は甘蔗とは逆に水の問題が(肥料と共に)重要になったのに。

稲は嘉南大圳の内外を問わず、品種改良が進んで1甲あたり収穫量が増大し、かつ蓬莱米のような日本に販売できる品種を作付できるようになった。さらに1930年代に入ると米穀増産抑制政策が始まる。これは新規水利施設の建設中止と転作奨励が手段であり、既存の蓬莱米水田を強制的に潰すものではなかった。この政策は既存の蓬莱米生産者にとってみれば、新規参入が制限され安定して日本市場に販売できる一種の利権を獲得できたことを意味した。ただし収穫量増と日本市場販売という利益を獲得できたのは、水がある地域の生産者のみである。蓬莱米を含め、稲の新品種は(それまでの稲と違い)水と肥料があることが生育の大前提なので、水がない区域は水のある区域の収益増を指をくわえて見ているしかなかった。

嘉南大圳区域はどうか。区域15万甲は、土地を改良し水や肥料の使い方を学習すれば、蓬莱米を含む新品種の水稲を作付できた。第三章で示された通り、3年に1年(水稻区)は当然の権利として作付でき、残り2年(甘蔗区や雑作区)は(指定の逸脱であり)水の確保に問題はあるものの作付可能だった。水の無い土地を持っていて、嘉南大圳により水が来た場合、収穫量増と日本市場販売という利益を得る機会にぎりぎり間に合ったということになる。

さて嘉南大圳への抵抗運動に話を戻そう。抵抗運動には2種類の性格があった。一つは費用負担の過重への抵抗である。水が十分でない(来ない)のに水租を請求することへの抵抗、水の負担金が高過ぎることへの抵抗、嘉南大圳が放漫経営で管理者が無駄に高給をとっていることへの反感とかである。もう一つは、水の使い方への抵抗、特に既存水利があり水稻二期作を可能とする水があったのに嘉南大圳に組み込まれて水利用に制約を受けてしまったことへの抵抗である。この2つはどちらも抵抗である。しかしながら性格が異なる。負担過重への抵抗は、水路が完成し水が来て、台湾人の抵抗もあって負担金が減額され、放漫経営が改善されて無駄に高給をとっている管理者がいなくなれば、言い換えると水の代金が(水が来る前後での農業収益の変化と比べて)妥当な額に近づけば、沈静化して行く。特に水が無かった地域では早期に嘉南大圳への反感から、順応(嘉南大圳のシステムを受け入れること)へと転換したはずである。第三章の115-116頁の表3-1「模範的水利実行小組合長」に名前が挙がっている人数が、北港郡と東石郡に多いのはその表れであろう。

(2) について。一方で抵抗が継続するのは、水の使い方への抵抗である。その中には 1944 年の排水路費への抵抗 (93-94 頁) もあるが (これは貴重な事例であって資料発掘には敬服したい)、主な抵抗は、既存水利があり水稲二期作を可能とする水があったのに嘉南大圳区域に組み込まれた地域での抵抗である。これは水稲の作付回数が制約されて、本来なら得て当然の収益をみすみす見逃すわけであるから、二期作を取り戻すまで沈静化は難しい。

ここで考えてみたいのは、1920 年代に米穀増産政策が始まったのに、その一翼を担うはずの水稲二期作地を三年輪作に組み込んで水を奪う (その代わり、水稲には不慣れな農民にも水を配る) という不合理が、どうして行われたかである。水が足りないといっても、台湾は砂漠ではない。降雨はあるのでため池 (平地につくる皿池) を各地で築造すれば、わざわざ水稲二期作地から水を奪う必要はない。水路と各地のため池を結合した水利システムは、すでに桃園大圳で形成されていた。そして八田與一は桃園大圳の計画にも深く関与していた。それがなぜ嘉南大圳に取り入れられなかったのか。

評者なりの見通しを言えば、我々が八田與一の嘉南大圳と言っているのは、実は第 1 期工事が竣工しただけに過ぎないのではないだろうか。第 1 期工事にて予算の範囲内で嘉南平原に水利システムを構築して暫定運用を始め、負債返済に目途がついた段階で早めに水源増設のための第 2 期工事を行い、システムを完成させて全域に十分な水を送水する、のが (資料的な裏付けはともかく) 八田ら水利技術者の心積もりだったのではなかろうか。それならば従来より不利益になる場所があっても、全域で見れば利益が上回るし、第 2 期工事ができれば当該地も増産に至る見込みなのだから、暫定運用ということで我慢して欲しいという考えに技術者は至るだろう。予算や手順の関係で、事業を第 1 期、第 2 期と分けて施工することは珍しくない。日本の水利でも、例えば琵琶湖疏水にしても愛知用水にしても、第 1 期工事竣工後ほどなく第 2 期工事に着手し、当初とは姿をかなり変化させたものを完成形としている。嘉南大圳で言えば、ため池にしても、水系を跨いだ送水路にしても、(219 頁にある、台中州で) 朱江淮の発見したような地下水の活用にしても、1930 年代の技術で可能な話である。それが米穀増産抑制政策のため第 2 期工事に着手できないまま、暫定運用を長期化せざるを得なくなったのではないだろうか。

そうであるならば、米穀増産抑制政策が解けて地下水の活用が始まり、糖業の縮小をも総督府が主張しはじめた 1939・40 年になれば、米穀増産のための第 2 期工事がいずれ始まり三年輪作はいずれ有名無実化する、との展望が台湾人側におぼろげながら見えてきたはずである。280 頁の劉明電や陳逢源の主張は、その展望の表れではないか。実際は台湾糖業が戦後も 1950 年代中は貿易協定によって日本へ安定的に輸出を続けていたこともあって、三年輪作の有名無実化は 1960 年代に持ち越された。しかしながら、農民側にも三年輪作の有名無実化への展望が見えてくれば、水の使い方への抵抗は有名無実化の実現まで続くにしても、嘉南大圳への思い、嘉南大圳システムへの考え方は早々と変わってくるのではないか。

なお序章 13 頁で、曾山毅の書名を間違った上に『』でなく「」である。校正ミスかと思うが注意されたい。